

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	野 沢 絵 梨
			職 位 ・学 位	氏 名 印
論文審査担当者	主 査		慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 教授・博士 (医学)	石田 浩之
	副 査		慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 教授・理学博士	渡辺美智子
	副 査		慶應義塾大学スポーツ医学研究センター 教授・博士 (医学)	橋本 健史
	副 査		慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 教授・博士 (医学)	大谷 俊郎
(論文審査の要旨)				
【研究の背景と目的・意義】				
<p>近年日本のスポーツ界では、選手の人間的な成長を促す指導の在り方が注目されているが、技術・体力・戦略の指導と比較すると科学的な根拠に基づいた指導が浸透しているとは言い難い。このようなスポーツ界の課題に対して、国内では2000年代に入り、スポーツを通じたライフスキル育成の必要性が検討され、研究やスポーツ現場での実践が徐々に進んでいる(島本, 2008; 上野, 2011; 図子, 2014)。ライフスキル(以下LS)とは、「人々が現在の生活を自ら管理・統制し、将来のライフイベントをうまく乗り切るために必要な能力(Danish et al., 1992)」と定義される社会心理的能力である。中でもスポーツ場面で育成されるLSは「人として・アスリートとしての成長を促す能力(島本ほか, 2013)」であると示されている。スポーツを通じたLSの育成については徐々に研究の数が増えているが、①LSと競技力の間に関連性があることの認識が広がっていないこと、②LSが可視化されにくいものであること、③どのようなLSの育成指導をすればよいのかわかりにくいことなどの理由で、一般的な指導者にはLSへの関心が広まっているとは言い難い。そのような現状をふまえて、本研究は以下の4項目を目的とした。</p> <p>(1) 選手のLSと競技成績の間関係性を明らかにすること、(2) 成績の高い選手が獲得するLSを明らかにすること、(3) 成績の高い選手のLSの獲得過程における経験の内容を明らかにすること、(4) 競技成績の高い選手が獲得したLSが競技パフォーマンスに望ましい影響を与える理由を検討すること。</p> <p>本研究の意義としては、指導者に対して選手のLS育成の必要性に関する認識を広げられること、選手にとって有益なLSがどのようなもので、それらはどのような過程を経て獲得することができるのかを検討する端緒となること、日本のスポーツ界において、エビデンスに基づく選手のLS育成方法を検討する一助になること、などが考えられる。</p>				
【研究の構成と概要】				
<p>野沢君が提出した学位請求論文「テニス選手が競技生活を通して獲得したライフスキルについて」は、研究の方向性を確認する目的で行った研究1(第2章)と、主たる研究として行った研究2(第3章)・3(第4章)の3つの研究から構成されている。</p> <p>第1章では、序論として研究の背景やスポーツとライフスキルに関する先行研究などについて述べられ、本研究の目的が示されている。</p>				

論文審査の要旨

No.

第2章(研究1)では、さまざまなレベルの大学テニス部に所属するテニス選手を対象に、選手の「競技成績」「集団凝集性」「LS」に関するアンケート調査を行い、潜在クラス分析を用いてそれらの関係性を明らかにした。その結果、選手を合理的に4つのクラスに分けることができ、それらの傾向から「競技成績」「集団凝集性」「LS」が正の関連性を持つ可能性が示された。また、各クラスの集団凝集性とLSの特徴を考察し、クラス毎の指導方針を提案している。本研究の要旨は「集団凝集性とライフスキルから見る大学テニス部員の類型化—潜在クラス分析によるアプローチ」としてコーチング学研究.2019;32(2):159-169に掲載された。

第3章(研究2)では、研究1の結果を踏まえて、学生全国大会(大学生対象の全国大会)でトップレベルの競技成績を残した元学生テニス選手9名を対象に行ったインタビュー調査から、テニス選手がスポーツ経験を通して獲得したLSと、そのLS獲得に関わる経験の内容を明らかにすること、また対象者らのLSの獲得経験が、パフォーマンスに望ましい影響を与える要因について検討をすることを目的として質的研究が行われた。なお、LSは他者との関わりによって獲得される「対人スキル」と、個人の自主的な取り組みによって獲得される「個人的スキル」に大別されるが、研究2ではチームという集団の中で、他者との関わりによって獲得される「対人スキル」に着目している。その結果、抽出された意味単位は17のサブカテゴリーに分類され、最終的に「意思表示」「他者感情の思慮」「ミーティング」「役割遂行」「組織貢献」の5つのカテゴリーにまとめられた。これらのカテゴリーの名称は、対象者らの経験によって構成された「獲得したLSの名称」と位置付けられ、この結果から獲得した5つの対人スキルと、その獲得に結びつく経験の内容も明らかにされた。対象者らが獲得したLSがパフォーマンスに影響する要因を検討したところ、チームとして仲間と共通の目標に向かう中で「意思表示」「他者感情の思慮」「ミーティング」の3つのLSの獲得が良好なコミュニケーションを促し、それが「役割遂行」「組織貢献」のLSの獲得に影響を与えていると推測できた。さらに「役割遂行」「組織貢献」LSの獲得が、競技に対する他者志向的動機の強化に繋がり、それが選手のパフォーマンスへ望ましい影響を与えるという仮説が提示されている。本研究の要旨は「大学トップクラスのテニス選手がチームでの活動を通じて獲得したライフスキル—対人スキルに着目して」としてスポーツ産業学研究.2019;29(4):253-268に掲載され、2019年度日本スポーツ産業学会奨励賞を受賞した。

第4章(研究3)では、研究2と同じインタビューデータの質的分析から、特にテニス競技で競技成績との関係性が明らかにされている「個人的スキル」の獲得について検討された。その結果、抽出された意味単位は18のサブカテゴリーに分類され、最終的に「内省」「逆境抵抗」「目標設定」「課題解決」「自律的指導受容」の5つのカテゴリーにまとめられた。この結果から、研究2と同様に5つの個人的スキルを獲得していたことが示され、その獲得に結びつく経験の内容も明らかになった。各LSは主に自己決定により獲得されており、それにより自己効力感を向上させていることが考えられた。また「自己変容」「逆境抵抗」はレジリエンスを高め、「目標設定」「課題遂行」は自己調整学習によって効率的に課題の達成を促していると考えられた。これらの結果からLSの獲得が選手のパフォーマンスへ望ましい影響を与える仮説が提示されている(図4-1)。本研究の要旨は「大学トップクラスのテニス選手が獲得したライフスキル—個人スキルに着目して」としてスポーツパフォーマンス研究.2020;12:32-45に掲載された。

【まとめ】

研究1-3の結果から、大学テニス選手において、競技成績の高い選手や大学で競技成績を向上させた選手は、自身が所属するチームの集団凝集性が高いと認知している傾向が明らかになり、また様々なLSが高い傾向にあることが示された。そのことから、テニスの様な個人競技において

論文審査の要旨

No.

も、所属するチームに対する集団凝集性の認知の度合いと競技成績に正の関わりがある可能性が示された。また、大学全国トップクラスの競技成績を残したテニス選手が、スポーツ経験を通して獲得したLSには、個人的スキルとして「内省」「逆境抵抗」「目標設定」「課題解決」「自律的指導受容」の5つが、また対人スキルとして「意思表示」「他者感情の思慮」「ミーティング」「役割遂行」「組織貢献」の5つがあることが示され、それらのLS獲得に関わる経験の具体的内容が明らかにされた。さらに、選手が獲得したこれら10のLSがパフォーマンスの向上に関係する理由について検討し、対人スキル、個人スキルそれぞれについての仮説を提示している。これらの研究成果は、競技成績を向上させる上でも、また選手が人間的に成長する上でも重要な、選手や指導者が獲得を目指すべきLSの種類や、その獲得法についての新たな根拠となると考えられる。

【評価点について】

本研究は、選手の人間的成長が競技成績と結びついている可能性について、自身のコーチとしての経験から出発した現場の疑問を量的、質的研究から丁寧に明らかにした点で高く評価できる。特に、スポーツ現場でこれまで漠然と感じられてきた選手の人間的成長の重要性について、一定のレベルで根拠を持って実証したことで、今後のスポーツ指導のあり方に変革をもたらす可能性を秘めている。今後は社会実装を目指した活動が期待されることである。

【課題について】

本研究の課題として、コントロール群がないこと、指導者へのインタビューが行われていない事、選手のパフォーマンスを直接計測していない事などがあげられている。研究の性格上コントロール群を置いた前向き研究は困難で、その意味で因果関係への言及には慎重になる必要があると考えられた。

【審査結果】

学位審査では以下のような点についての質疑応答が行われた。(1) LSの獲得は原因なのか結果なのかについて：厳密には因果関係を議論できる研究デザインにはなっていないが、前向き研究は難しいのでこの方法を採用した。今回の結果を理解した指導者が選手の環境を整えることでLSが獲得しやすくなると考えられる。(2) チームに(不向きで)所属せず、個人で競技を続けている人にも当てはまるか：個人でやっている人は今回の対象には含まれていない。それらを対象にしたら別の結果になった可能性はある。(3) 研究1の量的分析と、研究2、3の質的分析に繋がりがあつたか：研究1で考える力が低いclass 2の競技成績が結果的に向上し、高いclass 3が低下した結果に疑問が残った。尺度ではすぐえない何らかの因子が影響しているのではないかと考え研究2、3に進んだ。(4) 潜在クラスで性別が効いてこないか：性別は共変量に加えているが、テニスチームでは男女一緒に動くことが多いので、一緒に分析した方が現場の役に立つのではないかと考えあえて分けなかった。(5) 今回示されたLSを獲得するための指導とはどんなものか：海外では既にプログラム化されているが日本では遅れている。今回の研究は現場の役に立つものを作るためのスタートになる。(6) 対人スキルのみならず個人スキルも周囲との関係性から獲得されてくる場合がある、という指摘は非常に興味深い：自分を客観的に見るスキルを身につけることで選手は変われると考えている。

以上のような質疑の結果、自身の現場の体験から出た、おそらく多くの人が感じている疑問からスタートし、一定のレベルで検証して、さらに今後の自身の進路に生きる成果を得たことについては評価できるものであり、特に質疑に対する回答が非常に的確である点も高く評価され、審査担当者は一致して、本学位申請論文をもって野沢絵梨君に博士(スポーツマネジメント学)の学位を授与することが適当であると判断した。